

# 映画『イスラエル主義』解説

— 「認識の形成と変容」を軸に、イスラエル／パレスチナ問題の構造を読み解く —

ハデイ ハーニ（明治大学特任講師）

2026/2/23

## 導入：この映画が描くもの

---

『Israelism』（2023年、監督：エリン・アクセルマン&サム・エイラートセン）は、アメリカのユダヤ系若者たちが、幼少期から刻み込まれた「イスラエル支持」というアイデンティティの核を問い直していく過程を描いたドキュメンタリーである。

パレスチナに関する映画の多くは、被害や苦境に焦点を当ててきた。それらは重要であるが、問題の構造そのもの——すなわち、イスラエルという国家や、それを支える思想・認識のあり方に踏み込む作品は決して多くない。本作の特徴は、「内部からの視点」——イスラエルを愛するように育てられた人々が、その愛着の基盤そのものを問い直すという点にある。

**核心的な問い：**「ユダヤ人としての信仰・文化」と「イスラエル国家への無条件の支持」は、本当に不可分なものなのか。その「同一視」はどのように作られ、維持され、そして崩れ始めているのか。

## I. 主人公たちの物語：社会化から覚醒へ

---

映画は、二人のアメリカのユダヤ系若者の経験を軸に展開する。

### シモーネ・ジーマーマン（Simone Zimmerman）

ユダヤ系エリートとしての教育を受け、AIPAC（アメリカ・イスラエル公共問題委員会）等のロビー活動に身を投じる「イスラエル擁護者（アドボケイト）」として育てられた。彼女が後に語るのは、「コミュニティの最高のエリートとして教育を受けながら、占領の事実すら知らなかった」という衰撃的な告白である。彼女はその後、IfNotNow（「今でなければいつ」）というユダヤ系若者の運動を共同設立し、占領に反対する声を上げるようになる。

### エイタン（Eitan）

「ユダヤ人の盾」となるべく、アメリカからイスラエル国防軍（IDF）に入隊した。彼が現地で目撃したのは、教科書に描かれた「砂漠を緑に変えた奇跡の国」ではなかった。彼は、拘束され目隠しをされたパレスチナ人の若者が兵士たちに集団で蹴られ、その場で軍警察の将校がタバコをくゆらせながら黙って見つめている光景を目の当たりにする。この暴力の「凡庸さ」が、エイタンに「自分は何をしているのか」と自問させる決定的な契機となった。

#### 四段階のナラティブ構造

彼らの経験は、映画全体に共通する以下の四段階の構造を示している。

段階	内容
① 初期社会化	幼少期からの教育を通じて、イスラエルが「ユダヤ人の生存に不可欠」という認識が基盤として形成される。
② 認識の亀裂	占領地での現実（検問所・軍事行動）を目の当たりにし、教えられてきた「神話」と「現実」の乖離に直面する。
③ 転換	自らの加担を自覚し、それまでの言説体系を拒否する。
④ 行動	抑圧的な構造に反対し、パレスチナの人権のための政治的動員に身を投じる。

この構造は、個人の経験であると同時に、現在アメリカのユダヤ人コミュニティ全体で起きている「旧世代（既存組織）」と「新世代（変革を求める若者）」の断絶を象徴するものでもある。

## II. 背景知識：イスラエル／パレスチナ問題の基本構造

---

本作を理解するためには、単なる「二者の対立」ではなく、土地と歴史をめぐる「非対称な支配構造」を把握する必要がある。

### 二つの物語

**イスラエル側の物語：**数千年の迫害を経て、ホロコーストの灰の中から「故郷」を取り戻した奇跡。イスラエルは生存をかけた唯一の希望であるという語り。

**パレスチナ側の物語（ナクバ）：**1948年のイスラエル建国に伴い、約75万人のパレスチナ人が故郷を追われ、400以上の村々が破壊・消滅した「大災厄（ナクバ）」。この悲劇は現在進行形の「継続するナクバ」として捕らえられている。

1967年の第三次中東戦争でイスラエルがヨルダン川西岸地区、ガザ地区、東エルサレムを占領し、以後半世紀以上にわたる軍事占領が続いている。この占領は国際法上違法とされており、国連安保理決議 242 号も撤退を求めている。

### 現在の支配構造：「アパルトヘイト」の議論

- **占領と検問所：**占領と検問所：パレスチナ人の日常的な移動は広範な検問所ネットワークによって制限され、生活の基本的な尊厳が損なわれている。
- **入植地：**入植地：国際法上違法とされるユダヤ人居住区の拡大が、パレスチナ人の生活圏を分断している。
- **二重の法律体系：**同一地域での二重の法律体系が存在する。ユダヤ人入植者には「国内市民法」が適用される一方、隣接して住むパレスチナ人には「軍法」が適用される。これが「アパルトヘイト（隔離・差別）」と呼ばれる議論の核心である。

※「アパルトヘイト」という語は、元来南アフリカの人種隔離政策を指す。ここでは、国際人権団体（Human Rights Watch、B'Tselem、Amnesty International 等）がイスラエルの支配構造を分析する際に用いている法的概念である。

## III. 認識はどう作られるか：教育と刺り込みの仕組み

---

なぜ、アメリカのユダヤ系若者の多くが現地の悲惨な状況を知らずに育つのか。映画は、その認識が子どもの頃から戦略的に構築されている過程を描き出す。

### アイデンティティの「彫り込み」装置

**バースライト（Birthright Israel）：**若いユダヤ系アメリカ人に無料のイスラエル旅行を提供するプログラム。軍人との交流や観光地化された訪問を通じて、イスラエルへの感情的結びつきを醸成する。これまでに 80 万人以上が参加している。

**ガドナ（Gadna）：**サマーキャンプ等で行われる模擬軍事訓練プログラム。軍服を着用し、ヘブライ語の軍事命令（「パザツタ（伏せ）」等）をゲーム感覚で学ぶことで、軍事力を「ユダヤ人の強さ」として内面化させる。シモーネの高校の同級生の約 10% が IDF に入隊したという数字が、この内面化の深さを示している。

「民なき土地」神話：「A land without a people for a people without a land（民なき土地に、土地なき民を）」という言葉に象徴される、パレスチナ人の存在を透明化する教育。この言説によって、シモーネのような若者は「パレスチナ」という言葉自体を知らずに育つ。

#### 心理的背景：受け継がれたトラウマ

この「彫り込み」を支えるのが、ホロコーストの記憶との接続である。アウシュヴィッツへの訪問などを通じて、「ユダヤ人は常に攻撃される存在である」という恐怖を植え付けることで、パレスチナ人に対する「抑圧的な安全保障メカニズム」が正当化される心理構造が作られている。未曾有の悲劇の記憶が、現在の他者への抑圧を正当化する道具として転用されるという、深刻な倫理的矛盾がここにある。

## IV. 言葉が現実を隠すとき：「安全」「自己防衛」の機能

---

映画が描く構造を理解する上で重要なのは、特定の言葉がいかに関現を覆い隠し、権力構造を維持する機能を果たしているかという点である。

#### 「安全（Security）」という盾

「安全」「自己防衛」という言葉は、映画の中で、目隠しをされた拘束者への暴行や深夜の家宅侵入を正当化するための「盾」として繰り返し登場する。指揮官が暴力を振るう際に「これは安全の問題だ」と述べる描写は、この言葉が倫理的な問いを封殺する機能を持つことを示している。「安全」という言葉が発せられた瞬間、その行為の是非を問うこと自体が不可能になる。

#### 批判を封じる装置：「反ユダヤ主義」レッテル

「イスラエル＝ユダヤ教」という等式が作動するとき、イスラエル国家への批判は自動的に「反ユダヤ主義（アンチセミティズム）」というレッテルによって排斥される。また、コミュニティ内部から声を上げる若者は「自己嫌悪するユダヤ人（Self-hating Jew）」というレッテルを貼られる。

#### フォックスマン vs シモーネ：世代間の衝突

映画のハイライトのひとつが、名誉毀損防止連盟（ADL）の元代表エイブ・フォックスマンに象徴される「旧世代の番人」と、シモーネら「新しい世代」の衝突である。シモーネが看破したのは、自身のコミュニティが「パレスチナ側の問い」に対して、「反ユダヤ主義」という言葉以外に論理

的な回答を持ち合わせていないという事実である。これは、言説が現実を覆い隠せなくなった瞬間を形象化している。

フォックスマンにとってイスラエルは「究極の保険政策 (Insurance Policy)」である。しかし、この論理は決定的な矛盾を孕んでいる。イスラエル支持を最優先する既存のユダヤ系組織 (AIPAC や ADL) が、白人民族主義を煎る右派勢力を「親イスラエル」という理由で沈黙あるいは支持する一方、パレスチナの人権を訴える若者を「反ユダヤ主義」として攻撃している。「イスラエルの安全」が「ディアスポラのユダヤ人自身の安全」よりも優先されるという倒錯が、ここに生じている。

## V. 私たちとの接点：日本社会から考える

---

この問題を「遠い国の特殊なコミュニティの対立」として片付けることは、私たち自身の課題を見過ごすことにつながる。

### 「宗教対立」という誤解を解く

日本では、イスラエル／パレスチナ問題はしばしば「ユダヤ教 vs イスラーム」という「宗教対立」の枠組みで理解される。しかし、本作が描くのは、土地・法・権利をめぐる構造的な問題である。

「宗教対立」というフレームを外し、法的不平等という権利の問題として再定義することが、理解の第一歩である。実際、パレスチナ人にはムスリムだけでなくキリスト教徒もおり、彼らも同様に占領下の制約を受けている。

### 「消去された存在」への視線

映画で描かれる「パレスチナ人の不可視化」は、日本社会におけるアイヌ民族や在日コリアンといったマイノリティの歴史が、教育やメディアにおいてどのように扱われてきたかという問いと重なる。教育によって「存在しないことにされる」人々という問題は、地域や文化を超えた普遍的な構造である。

### 「複雑すぎてわからない」の構造

「複雑すぎてわからない」という言葉は、しばしば強者の現状維持を助ける盾として機能する。私たちが享受している安全や経済活動が、他者の権利を奪う構造の上に成り立っていないかを問うこ

とは、普遍的な倫理の課題である。また、日本はイスラエルとの間に防衛・技術協力を含む外交関係を有しており、この問題は決して「無関係」ではない。

## VI. 映画のあとで：知ること・考えること・つながること

---

### 知るための手がかり

- Breaking the Silence（沈黙を破る）：イスラエルの元兵士たちが占領地での経験を証言する団体。
- B'Tselem：イスラエルの人権団体。占領地の状況を記録・報告している。
- 国際人権団体の報告書：Human Rights Watch、Amnesty International 等が「アパルトヘイト」の認定に関する報告書を公開している。

### 考えるための論点

1. 「生存の安全」を確保するために他者の権利を構造的に犠牲にすることは、どのような論理によって正当化されているか。
2. 教育機関が特定のナラティブを独占し、事実を隠蔽することは、個人のアイデンティティ形成にどのような影響を与えるか。
3. 私たちの「当たり前」の中に、どのような偏りや空白が埋め込まれているか。

### つながるために

敵か味方かという二項対立を超え、人権と自由を基盤とした新しい連帯（Solidarity）のかたちがありうる。映画の中で、ユダヤ系の若者とパレスチナの活動家が共に声を上げる姿は、その可能性を示している。

### 推薦図書・映像資料

#### 入門書

イラン・パベ(2025)『イスラエル・パレスチナ紛争をゼロから理解する』河出書房新社。

岡真理(2023)『ガザとは何か——パレスチナを知るための緊急講義』大和書房。

岡真理・小山哲・藤原辰史(2024)『中学生から知りたいパレスチナのこと』 ミシマ社.

鈴木啓之・児玉恵美編(2024)『パレスチナ／イスラエルの〈いま〉を知るための24章』 明石書店.

早尾貴紀(2025)『イスラエルについて知っておきたい30のこと』 平凡社.

### より深く学ぶために

白杵陽(2013)『世界史の中のパレスチナ問題』 講談社現代新書.

イラン・パペ(2017)『パレスチナの民族浄化——イスラエル建国の暴力』 法政大学出版局.

イラン・パペ(2018)『イスラエルに関する十の神話』 法政大学出版局.

エドワード・サイード(2004)『パレスチナ問題』 みすず書房.

ラシード・ハーリディー(2023)『パレスチナ戦争——入植者植民地主義と抵抗の百年史』 法政大学出版局.